

津市埋蔵文化財センター情報

まいぶん津

2011. 3. 31
第9号



薬師谷14号墳出土水晶製三輪玉・水晶原石

最近の調査から

多気北畠氏遺跡第33次調査 (景賞院跡第1次調査)

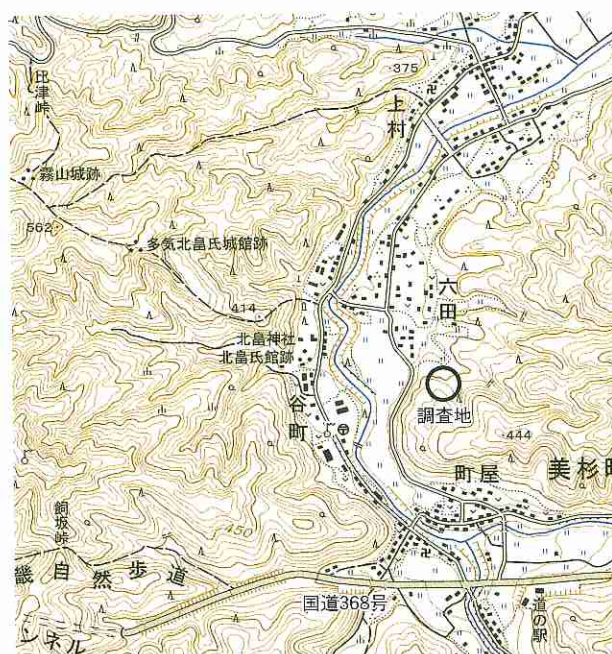
津市では、国史跡多気北畠氏城館跡とその関連遺跡の解明のため、学術調査を実施しています。このたび、平成22年8月から9月にかけて、津市美杉町に位置する多気北畠氏遺跡の第33次調査を実施しました。今回の調査は、多気北畠氏遺跡内では初めての寺院想定地での学術調査になります。

景賞院跡は、多気北畠氏遺跡のほぼ中央に位置し、北畠氏館跡の真正面の八手俣川を挟んだ高台に立地しています。ここは北畠氏館跡から東へ延びる東西幹線地割の延長上に位置する重要な場所で、寺の名前は北畠氏の一族の和歌などに度々出てきます。遺跡の現況は水田と山林で、全体の面積は約8,000㎡に及ぶと推定されています。

調査は、水田に2箇所、山林の尾根状部分に4箇所、谷状部分に5箇所の合計11箇所の調査区(161㎡)を設けて行いました。その結果、広範囲にわたって斜面の削平や盛土等による造成が行われ、平坦面がいくつも形成されていることがわかりました。

遺物は、表土直下の遺物包含層と盛土から出土したものが大半を占めます。15世紀中頃から16世紀後葉の土師器、陶器、中国産の磁器、五輪塔(墓石)の一部などがあり、景賞院跡の西側に広がる上多気六田地区の調査で発見されたものよりも、古い時期のものが確認されました。

今回の調査では、西側の水田や尾根状部分では遺構・遺物が少なく、東側の谷状部分で複数の遺構と多くの遺物が発見されました。また一方で、寺院跡の明確な痕跡は確認できませんでしたが、現在でも調査区以外にも五輪塔が複数散布しており、寺院跡の解明に向け、今後の調査が期待されます。(村木一弥)



遺跡位置図(国土地理院『伊勢奥津』1:25,000より)



調査区の状況(南西から)



五輪塔の出土状況(北西から)

市指定史跡

大名塚古墳

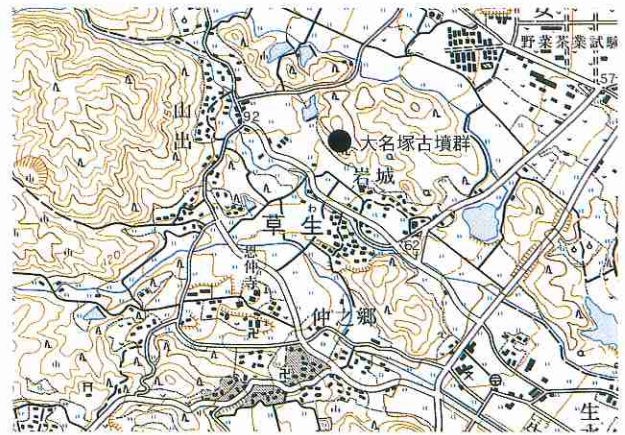
大名塚古墳は安濃町草生字四反田、経ヶ峰の麓の標高約90mの丘陵に位置します。本来は3基からなる古墳群ですが、現存する1・2号墳のうち、1号墳が「大名塚古墳」として市の史跡に指定されています。

1号墳は、直径21m、高さ6～7mの円墳で、丘陵の麓に南西方向に横穴式石室がポツカリと大きな口を開けています。安濃川流域で最大の規模を誇る両袖式の石室は、現存する長さ8.95m、玄室は長さ4.55m、幅1.9m、高さ2.9m、羨道は長さ4.4m、幅1.2m、高さ1.6m、玄室の奥壁や側壁には1m前後の大きな石が数段積み上げられ、その上にさらに巨大な天井石が架構されています。

この石室は古くから開口していたようで、記録によると、明治36年(1903)に土地所有者によって発掘が行われ、銅鏡2枚、石製の剣、勾玉をはじめとする玉類、鉄刀1本、須恵器等、多数の遺物が出土したとあります。現存する

遺物は少ないのですが、所有者の元にわずかに残る須恵器から、1号墳の築造は6世紀後半と考えられています。

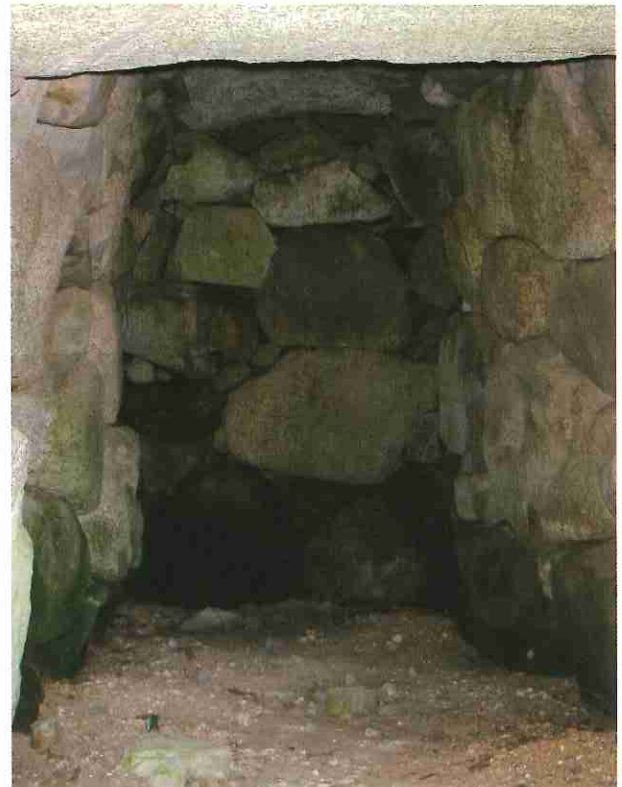
安濃川流域は、経ヶ峰・長谷山の山麓に横穴式石室をもつ古墳が高密度に分布する地域として知られています。そのなかでも、大名塚1号墳は、横穴式石室の規模や出土したとされる副葬品の内容から、この地域を支配した豪族の奥つ城と考えられます。(田中秀和)



遺跡位置図(国土地理院『棕本』1:25,000より)



大名塚1号墳(南西から)



大名塚1号墳の横穴式石室

特集 古墳時代後期の玉類

装身具（装飾のために身につける工芸品）のルーツは古く、日本列島で石、骨、角、牙、貝殻などで装身具をつくって身を飾るようになったのは、旧石器時代後期（約17,000年前）からとされています。

古墳時代の装身具には、髪飾り、冠や冠帽、首飾り、耳飾り、指輪や腕輪、足輪、帯飾りなど様々な種類がありますが、特に6世紀代は首飾りや耳飾りを着けることが広く普及した時期といわれ、市内の古墳からも石やガラス製のまがたま・くだたま・まるだまなどの玉類を連ねた首飾り、金メッキをほどこした耳飾りなどの装身具が多く出土しています。今回は装身具や装飾具として用いられた古墳時代後期の玉類を紹介します。

薬師谷古墳群(一志町八太)

丘陵尾根上に築造された24基からなる古墳群で、11号墳の横穴式石室からは、縦3.5cmの大振りめ のうの瑪瑙製勾玉、瑪瑙製丸玉、へぎぎよく碧玉製管玉、ガラス小玉が出土しました。また、14号墳の横穴式石室からは、大刀の装飾具として用いられた水晶製のみ わだま三輪玉が7個、加工を施していない水晶の原石が54個、ガラス製の勾玉や小玉、碧玉製管玉などが出土しました。

なお、14号墳出土の淡い緑色をしたガラス製勾玉は長さ2.0cmで湾曲した部分に緑色のガラスで象嵌ぞうがんが施されています。



薬師谷14号墳出土 水晶製三輪玉・水晶原石

一色山1号墳(久居一色町)

長野川右岸段丘上に築造された9基からなる古墳群で、横穴式石室をもつ円墳の1号墳から、水晶製勾玉や長さが0.9~1.6cmの大小合わせて16個の水晶製きりこだま切子玉、ガラス小玉などが出土しました。

ツツミ2号墳(安濃町東観音寺)

丘陵端部に築造された2基からなる古墳群で、横穴式石室からガラス製勾玉、ガラス小玉、長さ1.2~3.8cmの碧玉製管玉などが出土しました。首飾りの中心となる勾玉は長さが1.5cmと市内最小のものです。

君ヶ口古墳(長岡町)

安濃川の支流である美濃川左岸丘陵に築造された古墳で、埋葬施設である横穴式木芯室よこあなしきむくしんしつから、碧玉製管玉、ガラス玉、埋木製棗玉うもれぎ なつめたまが出土しました。埋木とは、樹木が地中に埋もれて、石化する前の状態のまま保存された



遺跡位置図



薬師谷14号墳出土 碧玉製管玉、ガラス製勾玉・小玉

ものです。これらの棗玉は炭化していない箇所では、今もしっかりと木目が確認できます。

鎌切古墳群（緑が丘一丁目）

岩田川右岸の丘陵に築造された3基の前方後円墳（おこし古墳を含む）と3基の円墳からなる古墳群です。木棺直葬の前方後円墳である3号墳からは碧玉製管玉、琥珀製棗玉、瑪瑙製丸玉、滑石製白玉、ガラス玉などが出土しました。小規模な木棺直葬の円墳である5号墳からは、ガラス玉は101個出土しましたが、勾玉は光沢のない閃緑岩製のものでした。

また、今回は掲載していませんが、木棺直葬の4号墳からは土製の練玉が出土しました。

こうして各古墳の装身具を比べると、古墳ごとに玉の種類、材質、大きさ、数量、組合せなどが異なることに気づきます。

古代の人々にとって装身具・装飾具は、現代人のアクセサリのように個性を表現したものとは少し異なり、地位や権力を表象したものであったと考えられます。（藤田充子）



ツツミ 2号墳出土 碧玉製管玉、ガラス製勾玉・小玉



君ヶ口古墳出土 碧玉製管玉、ガラス玉、埋木製棗玉



一色山 1号墳出土 水晶製勾玉・切子玉、ガラス玉



鎌切 3号墳出土 碧玉製管玉、ガラス玉、琥珀製棗玉、瑪瑙製丸玉



薬師谷11号墳出土 碧玉製管玉、ガラス玉、瑪瑙製勾玉・丸玉



鎌切 5号墳出土 閃緑岩製勾玉、ガラス玉

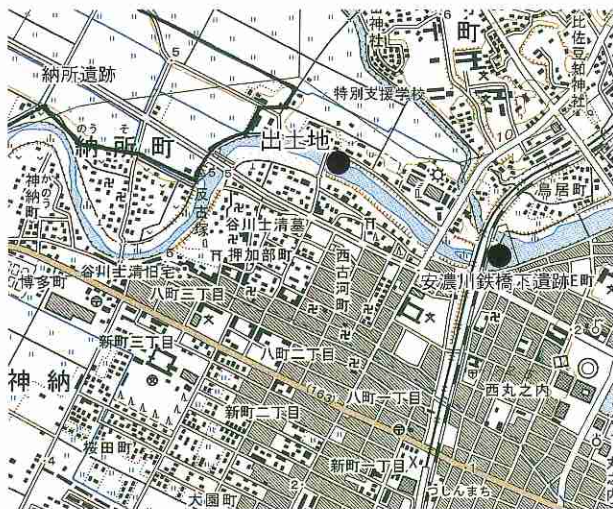
寄贈資料紹介④

安濃川河床出土の土器

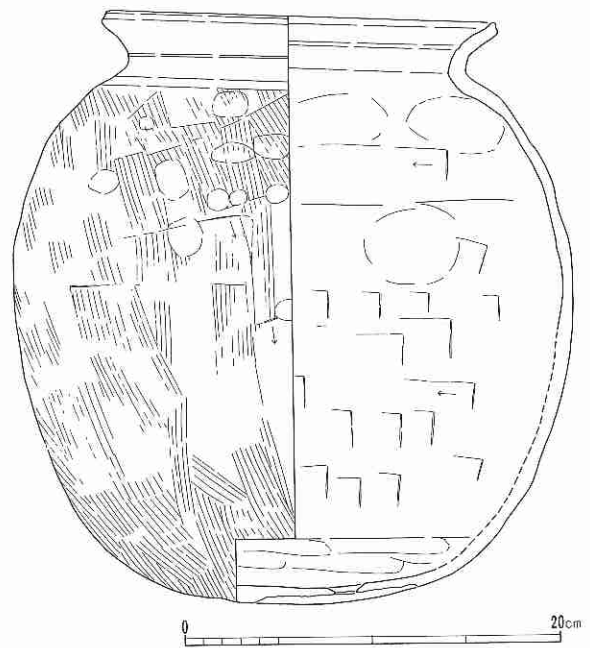
平成21年9月に、安濃川の河床で採集された土師器の甕^{かめ}を1点寄贈いただきました。

この甕は、昭和22年に西古河町と観音寺町の間にかかる三本松橋のすぐ下流の河床で採集されたものです。採集されたときの詳しい状況等は明らかではありませんが、古墳時代のものと考えられます。口縁部が1/5ほど欠損していますが、体部は完存しており、底部に焼成後の穿孔^{せんこう}が1箇所認められます。

ところで、この甕が採集された地点から下流500mには安濃川鉄橋下遺跡があります。鉄道の鉄橋工事の際に、弥生土器等の遺物が出土したようですが、遺跡の実態については明らかではありません。今回の寄贈資料もどのような遺構に伴うものか不明ですが、この地域の歴史を考えるうえで貴重な資料となりました。
(村木一弥)



出土位置図(国土地理院『津西部』1:25,000より)



遺物実測図(1:4)



安濃川河床出土の土師器甕

編集後記

今回お届けしたのは津市のベストジュエリーコレクション。古今東西、人々の心を惹きつけてやまない魅惑の輝きをご堪能いただけたでしょうか…
(編集子)

発行日：平成23年3月31日
編集発行：津市埋蔵文化財センター
〒514-0058 三重県津市安東町1225
TEL 059-229-0210
FAX 059-229-4601
印刷：森田印刷株式会社